

## 逝去された名誉会員への追悼文

### 小西 宏先生を偲んで



大正6年6月26日生  
 昭和16年 北海道帝国大学医学部  
 卒業  
 昭和17年 軍籍  
 昭和21年 引揚援護院医療課，病  
 院課，結核予防課  
 医務局総務課勤務を経  
 昭和33年 人事院職員厚生課長

昭和36年 厚生省児童局母子衛生課長  
 昭和37年 厚生省公衆衛生局結核予防課長  
 昭和40年 千葉県衛生部長  
 昭和43年 国立がんセンター運営部長  
 昭和45年 神奈川県衛生部長  
 昭和47年 社会保険審査会委員  
 昭和54年 神奈川県子ども医療センター長  
 昭和57年 恩賜財団済生会理事  
 昭和62年 恩賜財団済生会顧問  
 平成19年10月25日 逝去（享年90歳）

平成20年4月2日小西先生が永眠されました。

小西先生は、大正6年6月26日のお生まれで、昭和16年12月北海道帝国大学医学部をご卒業、まさに太平洋戦争突入の時期であり、直ちに海軍軍医として召集され、激しい時期を体験され、昭和18年には大尉に昇任され、終戦によって軍歴を離れ、昭和21年4月から、復員・引揚援護院医務局医療課を経て、昭和22年2月、厚生省医務局病院課に配属されました。

昭和27年11月WHOのフェローとして米国および英国の病院調査をされて帰国。その成果をもって、昭和28年5月から、厚生省病院管理研修所の教育主任として、我が国の国立病院の近代化の基礎づくりに従事されました。

病院管理研修所のバイブルとして位置づけられ小西先生が大切に保管しておられたMalcolm T. MacEachernの「病院管理学」(Hospital Organization and Management)を研究所(平成2年から国立医療・病院管理研究所)に寄贈していただいたことが記憶に残っております。

当時、占領軍の中でリーダーシップをとっていたC. F. サムズ博士によれば、日本の病院管理の水準は極めて低く、これを改善するために昭和24年に病院管理研修所が開設されたのです。

昭和36年10月母子衛生課長に就任されましたが、当時は妊婦の妊娠中毒症が大きな問題となり、医療費援助による受診促進がはかられました。昭和37年12月結核予防課長に就任、第3回の全国結核実態調査を行い、その結果として要医療者数が前回調査より、100万人減少したことを確認されました。

小西先生は、神奈川県のご出身であったところから、神奈川でのお仕事に強い愛着をもっておられたと思われます。衛生部長として在任中に、福祉施設と病院を併設した全国でも初めての総合リハビリテーション施設の建設に携われました。また、昭和45年には肢体不自由児施設および重症心身障害児施設を併設した、小児専門医療施設として「子ども医療センター」の開設に携われ、自閉症病棟等の施設整備の充実をはかられました。その後、10年ほど経ってから昭和54年6月に、子ども医療センターの所長に就任されることになり、脳性マヒ、精神発達障害などの障害をもった児童の医療の充実につとめられました。

また、千葉県衛生部長に在任中、昭和41年第23回日本公衆衛生学会の副会長として公害問題に重点を置いた、学会の運営に力を尽くされました。(会長；谷川久治千葉大学長、学術担当副会長；柳澤利喜雄教授)

小西先生は、平成3年から財団日本公衆衛生協会の副会長に就任されましたが、この時期に全国の保健師のリーダーによる自主的研さん機能を向上するため、全国保健師長会の立ち上げにも尽力されました。

以上のようにみえますと、小西先生は、海軍軍医としてのスマートさと、学者的風格を備えた公衆衛生マンとして、その生涯を全うされるという足跡を残されました。

ここに、公衆衛生誌の紙面をお借りして、小西先生の御業績を偲び、心からご冥福をお祈りいたします。

財団日本公衆衛生協会理事長 北川定謙

## 坂本 弘先生を偲んで



昭和3年11月2日生  
 昭和28年 三重県立医科大学卒業  
 昭和29年 三重県立大学医学部助手  
 昭和32年 同 講師  
 昭和33年 同 助教授  
 昭和48年 三重大学医学部助教授  
 昭和58年 同 教授  
 平成4年 三重大学名誉教授

平成10年～平成12年

三重産業保健推進センター初代センター長

平成11年 藍綬褒章受章

平成19年1月7日 逝去（享年78歳）

坂本弘先生は昭和28年三重県立医科大学（現・三重大学）を御卒業後、同大学医学部衛生学講座に奉職され、昭和58年同教授に昇任、平成4年に停年退官されるまで永年にわたって衛生学研究、医学教育、公衆衛生活動に精励されました。また、健康管理論ではメンタル・ヘルス・ケアの職場への導入の草分け的存在であり、その方法論および実践指導を精力的に行われ、精神保健の向上に寄与されました。一方、わが国の急速な高齢化の進展に対する保健医療福祉の充実をはかり、老人保健法に示された内容の具現のために、ヘルス・マン・パワーに関する研究、在宅ケアの開発に関する研究、痴呆老人ケアの研究をおこない、厚生省研究班員として長く勤められました。

三重県の公衆衛生活動の研究の推進を目指して三重県公衆衛生協会を設立され、三重県下の公衆衛生に関わる研究者や技術者、行政官が集まる研究交流会が現在も続いています。産業保健の分野においては三重産業保健推進センターの設立に努力され、平成10年から平成12年の間、初代の三重産業保健推進センター長として、また、その後も同センターの相談員として、産業医等の産業保健関係者の産業保健活動や地域産業保健センター活動の支援にその力量を遺憾なく発揮し、労働衛生行政の推進に大きく貢献されました。これらの労働衛生推進の功績により

平成11年に藍綬褒章を受章されています。

騒音や音楽を含む音の生体影響について生涯にわたり研究を続けてこられました。騒音と適応に関する研究は、騒音環境下における内分泌系および自律神経系の平衡動態を明らかにし、医学領域のみならず、音響関連学会においても高く評価されています。また、その研究から発展したアメニティ・サウンドの研究においては、わが国の中心的存在として研究進展に大きく貢献されました。

私は昭和59年に坂本先生が教授として主催される当時の衛生学教室に入局させていただきました。騒音の催奇形作用に関する研究を学位論文のテーマとしていただき、実験研究の「いろは」から御教示いただきました。また、母子健康手帳の改訂に関する厚生省研究班の研究として、乳児健診の場を借りて母子健康手帳の利用状況の調査を行ったことが懐かしく思い出されます。東京で行われた班会議に同行させていただき、行政研究の面白さも教えていただきました。

坂本先生は広い分野にわたる数多くの研究業績を残され、明晰な頭脳と暖かい人柄で皆から慕われていました。もっとも坂本先生の研究指導は非常に厳しく陰ながら涙したという話も先輩諸氏から聞かされましたが、私には優しい印象ばかりが残っています。ヒゲがトレードマークの笑顔と大きな声でユーモアたっぷりにお話しされる姿が今でも目に浮びます。カラオケがお好きで、お酒が入ると一曲という楽しい一面もありました。また、写真が御趣味で、海外出張の折々に撮りためた作品を写真集「人のいる風景」にまとめられています。そこには坂本先生の「人」に対する暖かい眼差しと鋭い観察力がよく表れています。

坂本先生は衛生学・公衆衛生学をこよなく愛され、その研究と実践、そして後進の指導に生涯を捧げられました。その御功績を讃えるとともに深く感謝の意を表したいと存じます。

ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

三重大学大学院医学系研究科教授 村田真理子

## 鈴木継美先生を偲んで



昭和7年2月26日生  
 昭和30年 東京大学医学部医学科  
 卒業  
 昭和35年 東京大学大学院博士課程  
 修了  
 昭和35年 東京大学助手（医学部  
 公衆衛生学教室）  
 昭和41年 東京大学講師（医学部  
 公衆衛生学教室）

昭和43年 東京大学助教授（医学部人類生態学教室）  
 昭和46年 東北大学教授（医学部公衆衛生学教室）  
 昭和54年 東京大学教授（医学部人類生態学教室）  
 平成4年 東京大学名誉教授  
 国立環境研究所副所長  
 平成6年 国立環境研究所所長  
 平成14年 勲二等瑞宝章授章  
 平成20年5月25日 逝去（享年76歳）

日本公衆衛生学会名誉会員 鈴木継美先生は、平成20年5月25日に肺炎のため逝去されました。享年76歳でした。

先生は、昭和7年2月26日にお生まれになり、昭和24年に新潟高等学校を卒業とともに東京大学に入学し、昭和30年に医学部医学科を卒業されました。卒業と同時に同大学大学院（生物系研究科社会医学専門課程）に進まれ、公衆衛生学教室において諸先輩の指導を受けながら研究者としての第一歩を踏み出されました。当時の公衆衛生学教室は松岡脩吉先生が主任教授を務められており、昭和34年に松岡先生が退任された後は勝沼晴雄先生が主任教授を務められました。

昭和35年に大学院を修了と同時に公衆衛生学教室の助手に採用され、昭和41年に講師に昇任されました。昭和43年に、同大学医学部保健学科（現、健康科学看護学科）人類生態学教室の助教授に昇任されました。人類生態学教室は日本で初めて東京大学に設置されたもので、昭和40年度の開設直後の1年間は浦口健二教授が担当され、その後は勝沼晴雄教授が公衆衛生学教室と兼担されており、鈴木先生に実質的な教室運営の多くを任されていました。昭和46年に東北大学医学部公衆衛生学教室教授に昇任され、昭和54年に東京大学人類生態学教室に教授として戻られました。平成4年に、東京大学を定年退職と同時に国立環境研究所副所長に就任され、平成6

年から同所長となり平成8年に退任されました。

鈴木先生は大変幅広い分野で活躍されました。私が先生にはじめてお会いしたのは、先生が人類生態学教室に移られた直後の昭和43年のことでした。環境保健・職業保健分野に強い関心をお持ちだった先生は、社会的にも大きな問題になっていた公害病の原因解明などを目指し、水銀などの重金属の中毒学の研究で優れた業績をあげておられました。一方で、先生の話の伺っていてきわめて印象的だったのは、狭義の社会医学にとどまらず、環境学、栄養学、労働科学、人口学、人類学など多くの分野に造詣が深いことでした。このような先生のリーダーシップの下で、人類生態学という学問分野の開拓を目指した私たちは、研究に対する幅広い視点の重要性を教えられました。また、国立環境研究所においては、環境研究における環境医学・環境保健学の進展に直接関わられるとともに、先生の所長在任時は環境基本法を受けた環境基本計画が制定されたときでもあり、基礎的研究と応用的研究との融合の強化など環境研究全般の発展、さらには環境行政における研究成果の活用などに関して多大な貢献をなされています。

先生は本学会にもきわめて重要な貢献をされました。昭和36年以来の会員で、昭和55～57年の3年間にわたり『日本公衆衛生雑誌』の編集委員長の重責を果たされています。当時は、公害病をはじめとする環境関連の論文が多かったときでもあり、先生は投稿論文に丁寧に目を通されていたご様子でした。先生が特に気にかけておられたのは、公衆衛生活動（業務）の意義をさらに高めるためにも、そのなかに科学研究の厳密さをどう取り込んでいくかという点にあったように感じています。このような先生の考えは、着々と浸透しているように思えます。

ところで、私の手許にあります先生の東京大学定年退官時における業績目録を開きますと、原著論文315篇、著書・編著27篇、単行本の分担執筆46篇、翻訳2編、総説・論著・その他124篇、報告書8編が記されています。精力的に論文・著書を著されたこととともに、多岐にわたるテーマに取り組まれたことに、先生の偉大さを改めて感じている次第です。鈴木継美先生の御霊に、心から感謝の気持ちを捧げますとともに、謹んでご冥福をお祈りいたします。

国立環境研究所理事長、東京大学名誉教授

大塚柳太郎

## 故鈴木武夫先生を偲んで



大正元年11月12日生  
 昭和10年 水戸高等学校理科卒業  
 昭和15年 東京帝国大学医学部卒業  
 昭和15年 国立公衆衛生院勤務  
 (労働衛生学)  
 昭和29年 国立公衆衛生院労働衛生学部長

昭和47年 国立公衆衛生院次長  
 昭和56年 国立公衆衛生院院長  
 昭和60年 同上 退職  
 平成19年10月25日 逝去(享年94歳)

鈴木先生が亡くなられてからはや1年余が経ったが、(平成19年10月25日逝去, 享年94歳)課題山積する現在の大気環境問題を考えるとまだまだ多くを教えて頂かねばならないのにと改めて強い悲しみに抱かれる。既に多くの雑誌や新聞に先生の追悼文が発表されており、重複があるかも知れないが先生の余人を以ては変えがたいご業績とお人柄を偲ばせて頂く。

先生は昭和15年以来国立公衆衛生院に奉職され、一貫して公衆衛生の教育と研究、さらにそれらの実践をととして人々の健康の保持と増進に大きな業績を挙げてこられた。国立公衆衛生院院長(昭和56年~60年)、(幼)大気汚染研究協会(現大気環境学会)会長(昭和47年~62年)、生活環境審議会会長(昭和57年~平成3年)、及びその他多くの要職を歴任され、これらの功績により昭和61年に勲2等旭日重光賞を受賞されておられる。国立公衆衛生院次長・院長の時代に故染谷四郎先生と共に国立公衆衛生院の大学院構想の実現に向けてのご努力は先ず特記すべきであろうが、本誌第51巻第12号における高石先生による“染谷先生を偲んで”に詳しく述べられているのでここでは特に触れない。ただ先生方の構想が必ずしも実現しなかったことを考え、一方今日における公衆衛生大学院の設立、また諸分野における独立大学院の実状を考えると先生方のお気持ちは如何なものであったかと感無きにしも非ずである。

先生の公衆衛生研究者としての最大の社会的業績は我が国大気環境基準の生みの親と言い得よう。深刻化する大気汚染の下時代の要請を受けて、先生は昭和43年以降、硫黄酸化物を始めとして6大気汚染物質の環境基準設定の基礎となる判定条件及び指針

の設定のための専門委員会の委員長を務められた。公害が社会問題化していた当時において我が国としては初めての試みであった環境基準設定には各方面から色々な雑音があり大変なご苦勞をされたが、また専門委員会の取りまとめも決して容易ではなかったが、先生は飽くまでも科学的データの上にならなくて先ず住民の健康を守るとの立場を頑なに貫かれた事は高く評価されるべきである。特に昭和53年、二酸化窒素の環境基準改訂に備えての専門委員会報告は、人に対する大気汚染の悪影響を健康な状態からの偏りをもって判断するとの考えを我が国で初めて明文化し、又異論もあったが指針を巾をもって提案されたが、これらも先生の見識とリーダーシップに大きくよるものであった。ともあれ、これら専門委員会答申を基に設定された我が国大気環境基準が、当時深刻であった硫黄酸化物を中心とする大気汚染の改善と人の健康保持に大きな役割を果たした事は明らかであり、先生のご功績を忘れてはならないだろう。

私は昭和34年から先生の下で大気汚染の呼吸器に対する生理学的影響の研究に従事していたが、昭和40年代末ごろから二酸化窒素(一次及び二次)、光化学オキシダントの環境基準に係わる専門委員会、また公害健康被害補償法の改訂に係る専門委員会の委員として先生の環境行政に係るお仕事に直接接する様になり、人活動に起因する環境汚染問題に対して公衆衛生研究者は如何にあるべきかをいくらかは学んだ様に思う。著しい産業構造の変化や科学技術の進展の下、従来目に見える公害から目に見えない公害へと大気汚染状況が変り、さらに発癌性物質が問題となっている今日においては、大気汚染の防止に採るべき手法は自ずと変わって来るであろう。しかし、何時如何なる時代になっても鈴木先生が終生頑なに守られた先ず人の健康を守るというご意思は継いでいくべきと思っている。

先生は大変真面目な方であり、お酒も召し上がられず特に面白いエピソードといったものの記憶はあまりない。ただ、研究者を含めて、恐らく叱られたこともあったに違いない当時の大気汚染行政に携わった人たちの多くが今でも先生のことを懐かしんでおられることがエピソードと言えるかも知れない。老境に達してもとても先生には及び難い自分を省みつつ先生を偲ばせて頂いた。

元国立公衆衛生院院長 横山栄二

## 多田 學先生を偲んで



昭和9年11月21日生  
 昭和35年 鳥取大学医学部医学科  
 卒業  
 昭和36年 鳥取大学医学部衛生学  
 助手  
 昭和41年 国立公衆衛生院専攻課  
 程医学科入学  
 昭和42年 同上 修了

昭和45年 鳥取大学教育学部助教授  
 昭和48年 鳥根県環境保健部公衆衛生課長  
 昭和53年 鳥根医科大学医学部環境保健医学講座教授  
 平成12年 鳥根医科大学名誉教授  
 平成12年 鳥根医科大学副学長  
 平成15年 同上 退官  
 平成20年10月7日 逝去(享年74歳)

多田學先生は鳥取大学医学部を昭和35年に卒業されました。その後、鳥取大学医学部衛生学助手、鳥取大学医学部衛生学講師、鳥取大学教育学部助教授、鳥根県環境保健部公衆衛生課長を経て、昭和53年に鳥根医科大学医学部環境保健医学講座教授に就任されました。平成12年からは3年5ヶ月に渡り鳥根医科大学副学長を務められました。私は多田學先生の後任教授として、平成12年より鳥根医科大学環境保健医学講座第一(現在は公衆衛生学)を担当しています。

多田學先生は、鳥根医科大学の初代環境保健医学講座第一教授として赴任され、先ず、鳥根医科大学における公衆衛生学の教育の礎を築きました。公衆衛生学の実習に地域の老人保健施設や健康診断に参加する形を取り入れ、高齢者の多い鳥根県での特徴を生かした教育を実践しました。これは医学を学ぼうとする学生の勉学意欲を刺激する良い機会となりました。地域を基盤とした教育は、この後の鳥根医科大学の教育方針の特徴とも言えるようになりました。

多田學先生は、研究分野では慢性砒素中毒症の対策、脳卒中对策事業など鳥根県において顕著な研究業績を挙げられました。慢性砒素中毒症の対策では、鳥根県旧笹ヶ谷鉾山の砒素汚染調査を実施し、

笹ヶ谷周辺住民健康調査で慢性砒素中毒患者の存在を確認しました。その後、鳥根県鹿足郡津和野町笹ヶ谷地区は慢性砒素中毒症指定疾患とする第二種地域として指定されました。また、脳卒中对策事業では、鳥根県で脳卒中死亡率の高い市町村を対象に、循環器健診の充実、脳卒中発症調査、生活実態調査、血圧管理システムの開発、寝たきり老人対策、医療・福祉の連携、コミュニティにおける健康教育など包括的な医療・保健・福祉活動を実施しました。その結果、地域住民における生活習慣の改善、高血圧管理状況の改善、栄養摂取状況の改善、脳卒中死亡率の減少を認めました。

多田學先生は、衛生学・公衆衛生学の領域の研究者の育成にも顕著な功績を挙げられました。鳥根医科大学環境保健医学講座の教授在任中は、社会と生態専攻の大学院生、研究生を熱心に教育・指導し、多数の衛生学・公衆衛生学領域の教授・教官と学位取得者を育成しました。

多田學先生は平成3年から平成5年まで3年間、日本公衆衛生学会の理事を務められました。また、平成16年には、学会長として松江市で第63回日本公衆衛生学会総会を開催されました。私にとってはこの学会が多田先生との楽しい思い出になりました。私が鳥根医科大学に赴任して間もない頃、多田先生から「今度、松江で日本公衆衛生学会総会を開催することになった。藤田先生一緒にやりましょう。」と言われ、学会運営のお手伝いをする事になりました。多田先生はこの一言を言うために、私をカラオケに連れて行ったり、焼き肉屋に連れて行ったりしました。学会も疫学調査と同じで始める前に仲間と食事するのが鉄則です。学会運営のお手伝いをして頂く先生方は鳥取大学医学部を始めとして全国各地から大勢集まりました。また、多田學先生が鳥根県公衆衛生課長時代に一緒に仕事をされた、鳥根県のOB職員の方々もお手伝いに大勢集まりました。多田先生の仲間は親身になって頑張りました。

多田先生には地域における公衆衛生活動の基本を教えていただきました。改めて、お礼を申し上げ、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

鳥根大学医学部教授 藤田委由